特別企画

同学院と緒方富雄先生

内　藤　　修
(財団法人 緒方医学化学研究所 理事長)

【同学院と緒方富雄先生】

日本臨床検査同学院の紋章は，日本では珍しい，ツタの葉(西洋ツタ)とラテン語をあしらった盾型のユニークなものであるが，これを創案したのが，同学院創立者で初代院長の故緒方富雄先生(1901-1989)である。

西洋ツタ(*Hedera helix*)は冬でも枯れることなく緑を保つことから，“変わらぬ誠実”のシンボルとされる。盾の下のリボンにあるラテン語は同学院のモットー「この人のため，この病人のため」を示す。同学院の創立記念式のあいさつで，緒方先生は同学院の使命を次のように述べている。

「同学院は研究団体としてではなく，“この病める男のため，この病める女のため”(PRO HOC, PRO HAC)をおもって，まずすでに専門家である会員みずからが，さらに学識をよりひろくたかくし，それによって自分たちの分野ばかりでなく，臨床病理学の各分野の向上にも力をかし，程度の高い水準をめざして進む推進力の中心になりたいと念じております。」

当初，日本臨床病理同学院として発足した同学院は，2003 年(平成 15 年)より日本臨床検査同学院と名称を改めたが，西洋ツタの紋章と PRO HOC, PRO HAC の精神は変わらず，2010 年には創立 35 周年を迎える。1985 年(昭和 60 年)には「緒方富雄賞」も制定され，これまでに 67 人の優れた受賞者を送り出した。

緒方先生は，梅毒の「緒方法」を開発した梅毒血清反応の世界的権威で，東大血清学教授の頃は厳格なことで知られ，「大将」「General」などと呼ばれてもいたというが，広く深い教養とユニークな発想を持つ多芸多才の人柄は，多くの人に感銘を与えてきた。

先生が亡くなられてすでに 21 年が過ぎたが，この辺りでその業績あるいは人となりを振り返ってみたい。

【曽祖父は「適塾」を開いた緒方洪庵】

NHK 大河ドラマ，司馬遼太郎原作の『花神』で宇野重吉が演じたのが緒方洪庵(1810-1863)であった。一般の人が洪庵を知ったのは，おそらくこのドラマが最初であったろう。洪庵は大坂に蘭学塾「適塾」を開き，『花神』の主人公 村田蔵六(のちの大村益次郎)，福沢諭吉，佐野常民ら多くの優れた人材が輩出した。種痘を広めることにも力を尽くし，大坂道修町に「除痘館」を設立，そのほか日本最初の病理学書『病理通論』，ドイツの名医フーフェランドの内科書を翻訳した『扶氏経験遺訓』，コレラの治療手引き書『虎狼痢治準』の出版など，多くの功績を遺した。

緒方富雄先生は洪庵の直系の四代目，曾孫に当た

写真 1　緒方富雄先生

緒方富雄先生略歴

1901 年大阪に生まれる。
1926 年東京大学医学部卒業。同学部病理学教室を経て血清学専攻，1934 年～1935 年ロックフェラー財団医学研究フェローとしてアメリカで研究。1936 年三田定則教授のあとを受けて東大血清学講座担任助教授，1949 年同教授。在任中東大医学図書館の建設に尽力，同館長を兼任。1962 年定年退官，東大名誉教授。1972 年オランダ国オランエナッソーコマンダー勲章受章。緒方医学化学研究所初代理事長。勲 3 等旭日中綬章受章。
1989 年没。

写真 2　蘭書を読む緒方洪庵の図と署名(満 40 歳)
(緒方洪庵と適塾より)

る。1901 年大阪に生まれ，名門天王寺中学に入学，神戸一中に転校，卒業して，自由な校風で知られた京都三高に学び，東大医学部に進学，1926 年に卒業，病理学教室を経て血清学を専攻した。ロックフェラー財団医学研究フェローとしてアメリカへ留学，1949 年に血清学教授。アメリカ医師会名誉会員，ニューヨーク科学アカデミー会員。蘭学，蘭学医学の資料の収集・研究にも力を尽くし，1972 年にはオランダ王国オランエ・ナッソー・コマンダー勲章を受章した。

財団法人緒方医学化学研究所を設立，『医学のあゆみ』『医学と生物学』の創刊など，医学・医療の進歩における功績は多方面にわたる。

【“語学の達人”－28 歳でギリシア語語源の本を出版】

ここに，2 冊セットでケースに入った B6 版の小さな本がある。『医学のなかのラテン語あれこれ』『語源ギリシア語法』の 2 冊である。『医学のなかのラテン語あれこれ』は，先生が昭和 45 年(1960)に『医学のあゆみ』に連載した内容を改めて刊行したものだが，『語源ギリシア語法』は，先生が実に 28 歳の若さで著した著書を，昭和 57 年(1982)に医歯薬出版株式会社が復刻刊行したものである。

『語源ギリシア語法』の序(昭和 4 年)で先生は，「私がこの本を著そうと思い立った動機は，私自身が必要上語源のことを穿鑿しなければならなくなった時，私にこの方面の予備知識が全くなかったために，随分歯がゆくも思い，不安にも思ったところに発します。それ以来私はひとりでよく気をつけてギリシア語法を調べ，私の懐いた数々の疑問の解決につとめました。そのうちにある程度の知識が出来，多少の見通しもつくようになりましたので，とりあえず系統的な語法を書き綴り，機会のある毎に，それを増補して行きました。それの体裁を整えたのがこの本です。」(現代仮名遣いに直した)と記している。

写真 3　「語源ギリシア語法」「医学の中のラテン語あれこれ」2 冊セットで刊行された

先生の大学在学中，叔父の緒方知三郎教授と三田村篤志郎教授が共著で『病理学概論』を執筆中で，先生はその手伝いをして，術語の理解を助けるために語源的な註をつける仕事を引き受けていた。

先生は，その仕事に携わっている間，自分でギリシア語法を調べ，抱いた数々の疑問の解決につとめ，知識を得たので，系統的な語法を書き綴ったおぼえがきをまとめて著したのが『語源ギリシア語法』であると述べている。

語源だけでなく，先生は文章を平易にするなど原稿の整理，図の配置など編集にも関わった。また，歴史的な部分の多くは先生の執筆になるといわれる。

【なぜギリシア語，ラテン語なのか？】

『医学のなかのラテン語あれこれ』の“はじめに”で，先生は「わたしは，外国語を学びはじめたときから外国語というものがすきでした。」「さて，医学をふくむ科学の世界では，あたらしい概念をもりこむため，原則としてあたらしい語をつくります。つまり術語の大部分はそういう人造語です。ヨーロッパの語系の場合は古代ギリシア語かラテン語の語幹です。それは現在のヨーロッパの大部分の国語が，むかしのギリシア語，ラテン語と密接な関係を持っているので，なじみやすいからです。実際ギリシア語やラテン語の語幹を使ってあたらしく造った術語，新造語を見て，およその意味の見当がつくのはそのためです。」とその重要性を説いている。

先生は英語，ドイツ語，フランス語にも堪能であ

ったが，特にユニークなのは英語の勉強法で，それは“発音記号を先に覚える”ことだった。発音記号を先に覚えて，そのあとに訳とスペリングを書いて覚えた，という。旧制の三高時代，英語の授業中に，教師の発音の間違いを指摘したこともあった。また，「英語の勉強にコンサイス辞書しか使わないようではだめで，Oxford Dictionary を使いなさい。英語を英語で読むようにしなければいつまでたっても上達しない」というのが口ぐせだった。

【『蘭学事始』の現代語訳】

『科学随想　三月四日』(雷鳥社)という緒方先生の著書がある。昭和 48 年初版の古い本だが，先生の科学に対する態度，こころを偲ぶよすがとなる一冊といえる。

明和 8 年(1771) 3 月 4 日，杉田玄白，前野良沢らが江戸の千住小塚原刑場に，はじめて腑分けを見に行った。そしてオランダの解剖書ターヘル・アナトミアの図と比べ，その正確さにおどろき，感心した。彼らはこの本を訳して日本の医学の役にたてようと決心，苦労の末，1774 年に『解体新書』を刊行した。西洋の学術書の本格的な翻訳のはじめである。オランダ語の辞書も何もない時代，その苦労は大変なものであった。後年，杉田玄白は，蘭学創始の思い出を綴った『蘭学事始』を著したが，その中で，腑分けを見た翌日，早速良沢の家に集まり，ターヘル・アナトミアに向かったが，艪や舵のない船で大海に乗り出したようなもので，茫洋としてどうしたらよいかわからなかった，と述べている。

写真 4　「ターヘル・アナトミア」オランダ語本の絵とびら
(緒方富雄校註，岩波文庫「蘭学事始」より)

緒方先生は昭和 16 年(1941)，『蘭学事始現代語訳』第 1 版を築地書店から出版した。

『科学随想　三月四日』の中で先生は，「日本の医者たちは，この『解体新書』によって，はじめて具体的に，西洋の精密な自然科学的な態度とその労作に接することができた。そして，ここに自然科学の芽生えがはじまったのである」「三月四日は，わたしたち医学，科学の人間にとって，なにより，大事な記念日なのである。」と述べている。

『蘭学事始』の訳本はその後もいくつか出版され，一部は中学の教科書に載るなど，ひろく普及した。

前野良沢の家があった場所に近い東京築地に，『蘭学事始』の意義を記念した「蘭学の泉はここに」という記念碑が建てられている。碑文は緒方先生であるが，その最後の行には「蘭学の泉はここにわき出て日本の近代文化の流れにかぎりない生気をそそぎつづけた。」と記されている。

【同学院と“College”】

“同学院”という研究団体名は珍しい。インターネットで検索すると“臨床検査同学院”が真っ先に出てくる。なぜ“同学院”なのか。名称の設定に深く関与した緒方先生は，創立 10 周年記念式で次のように述べている。

「“同学院”は“collegium”にあてた日本名で，原語の意味は“同学の士が集まるところ”というほどのことである。」「collegium は現代語としては college に相当し，一方では“学園”，“大学”を包含し，一方では特殊の目的を持った組織をさす。わが同学院は，後者にちかい。」

College の“みなもと”は，ラテン語の collegium で，同業，同学，同志の集合体をさす。日本では大学の学部，単科大学などの意味に使われ，イギリスのオクスフォード大学やケンブリッジ大学の college は，“学寮”ともいうべきものであるが，イギリスやアメリカには，大学とは全く性格のちがった college がある。それは同学の士の集団組織であって，会員はきびしい試験によって資格が与えられ，会員の学術的水準も高く，社会に対しても重い責任を持っている，と緒方先生は説く。

Royal College of Physicians of London(R.C.P.), Royal College of Surgeons of England(R.C.S.)などが有名で，R.C.P はウイリアム・ハーヴェイ，R.C.S. はジョン・ハンターを祖としてあがめているという。

こうしたことからも，先生の“同学院”に対する

思い入れのほどが知れよう。

【緒方富雄賞の制定】

1984 年，同学院創立 10 年の年に，緒方富雄賞が制定された。そのいきさつや，緒方先生自身の同賞に対する思いが，『同学院通信』第 9 巻第 10-12 号で述べられている。

「同学院の有志のなかで，同学院の活動範囲で貢献の大きかった人を高く評価するため，なにか“賞”を設けたいという意見が生まれてきた。それをいい出したのはわたしである。いろいろ話し合っているうちに，だんだんまとまったかたちをとるようになり，ある程度具体的なかたちをとってきた。そのとき，この“賞”の名称をどうするかという話が出た。どんな小さな大きさの団体でも，その団体の名称をそのままつかうことは，いろいろの考慮を必要とし，またかえって制約も生じる。そういうこともあって，提唱者であり，この同学院の育ての親ともいえる緒方富雄の名を大胆につけるのがいいのではないかということになり，わたし自身も説得されてそれを受け入れたのである。」

そして，賞にはいろいろあって，その目ざすところや賞金の財源などもさまざまであるが，「その賞の構造はどうであれ，賞を出す“こころ”は，基本的には人類愛に発している。」と説く。

先生が大切にしたキケロの言葉“心，それが医者を医者にする”が思い出され，感慨が深い。

【“心，それが医者を医者にする”－キケロ】

Pectus quod facit medicos―Cicero

“心，それが医者を医者にする”は緒方先生の訳である。

キケロは西暦前百年頃のローマの政治家・哲学者であるが，先生はキケロのこの言葉を非常に大切にしていた。

写真 5　緒方賞受賞者への記念品

「昔の医者は，仁術で人を助けるためになるのだということを教育されており，自分が医者なんだと思ったときに医者になれる。医者が医者の医者だということを意識する，その心が医者を医者にするのだ。心というのは人間だけにしかないのだから，大事にしなくてはいけない。」緒方先生はこう言って，折にふれ，「心」の大切さ，心がまえを説いた。

【ヒポクラテスの箴言】

緒方先生は日本ヒポクラテス協会を結成し，初代会長をされたほどで，ヒポクラテスへの思い入れも強かった。ヒポクラテスは，およそ 2500 年前にギリシアで活躍した，医学の父(医祖)あるいは医聖とよばれ尊敬されている人物である。

BC300 年頃，天の神ゼウスがこの世を支配し，その兄のハデスが冥界を支配していた。ゼウスの子が医神アポロンであり，その子アスクレピオスもまた医神であった。その子孫，ケンタウルス家の 17 代目がヒポクラテスである。

「芸術は長く，人生は短い」と訳されるヒポクラテスの言葉は多くの人が知っているところである。

英語では，life is short, art long である。art long には動詞がないが，緒方先生によれば，こういう場合は動詞を省いても意味が通じるからよいのだとか。

life is short, art long
opportunity fleeting
experiment treacherous
judgement difficult

これを先生は，次のように訳す。

生命はみじかい　技術はながい
機会は去りやすい
経験はだまされやすい
判断はむずかしい

ヒポクラテスという医学の哲人が，2 千年以上も前に言った言葉が今でも生きているのは，人間はどんなに勉強してもその本質は変わらないからだ，というのが先生の教えであった。

もうひとつ，先生が大切にしていたものに，「私は医の神アポロンに次のことを誓います」で始まる，「ヒポクラテス誓詞」がある。

「ヒポクラテス誓詞」

1　医術を教えてくれた人を敬います。
2　無報酬で後継者への医術の教育を行います。
3　自分の能力と判断の及ぶ限り，患者に利益のある治療法を取り，悪くて有害な治療法は取りません。

4　純粋で神聖な気持ちで生涯を貫き，医術を行います。患者の家を訪れるのは病気に対処するためであり，そこでの戯れや堕落した行為は取りません。男女・階級による差別は致しません。

5　職を通じて知りえた人の秘密は守ります。

・この誓いを守り，常に医学的実践を楽しみつつ行います。もしこの誓いを破るなら，その逆の運命を甘んじて受けましょう。

欧米では，現在でも医学生の卒業式に「ヒポクラテス誓詞」を朗読させるところがあると聞く。日本ではどうなのだろうか。

【Fildes の “The Doctor”】

イギリスの画家 Sir Luke Fildes の描いた “The Doctor” という名画がある。椅子を並べただけのベッドに重病の子供が横たわり，呆然と立ち尽くす父親と泣きくずれる母親，そこに医師が付き添い，病児を見守っている感動的な絵で，ロンドンの Tate 美術館に飾られている。

先生は，昭和 48 年の臨床病理学会で “臨床病理学ーその過去と将来” と題して記念講演を行った際，最後に “The Doctor” のスライドをうつして，「この絵をどう見るかは各自の自由であるが，この絵のような情景のなかで臨床病理学はなにをなし得るか？このような情景がつづく限り，臨床病理学は努力をつづけ，医療の助けにならなければならないと思うのである。」 と結んだ。

先生は，「医は心」と言われ，「仁術が医者の精神」としばしば語っていた。この絵は，医は仁術，あるいはヒポクラテス誓詞を表徴するものとして，多くの人に感銘を与えている。

写真 6　Fildes “The Doctor”（Tate 美術館蔵）
（「けんさ」4(6), 1973 より）

【ジャン・コクトーの “輸血の皿”】

緒方先生は輸血の方面でも熱心に活動され，東大の輸血部・中検の建設，日本輸血学会の設立など，積極的に行動した。

その証と言えようか。先生が毎号カラーページを執筆していた『けんさ』（株式会社ヤトロン発行）の第 1 号には先生の大切な “輸血の皿” の写真と解説が掲載されている。

「わたしは，おもいがけぬことからジャン・コクトー（Jean Cocteau, 1889-1963）のつくった絵皿を持っている。」「わたしがこの皿をもらったのは，1961 年 12 月 9 日パリのホテルであって，フランスの国立輸血センター（Centre Nationale de Transfusion Sanguine）の所長スーリエ博士からおくられたのである。」

「署名を見るまでもなく，いかにもジャン・コクトーの図柄である。だきあっている男と女のあいだを，あやしげな 5 本の管がかよっており，管のなかには赤い点が一列にならんでいる。背景には毛細血管をおもわせるようなアミが青色にかかれている。男の後頭部に，下から上へ “qui donne s’enrichit”（与えるものは，ゆたかになる）としるされている。輸血をあらわしたものである。これだけ具象的な手法で，これだけ象徴的に輸血を表現したのは，さすがにジャン・コクトーのひらめきといえよう。文句も象徴的である。」

この皿は，フランスの医学会総会でジャン・コクトーにデザインを依頼してつくられたものという。

先生は，「文化の爛熟した国は，各界のトップクラスの人たちが一同に会するサロンのようなものがあって，自然に交流がなされている。政治家のトップ，ビジネスのトップなど，本当に国を背負って立つ人たちがこのサロンに集まって同等に付き合っている。日本もできるだけ早くそうなって，文化の質を高め

写真 7　ジャン・コクトー作「輸血の皿」
（「けんさ」1(1), 1970 より）

てもらいたいものだ。それだけもっと勉強しなければ。」というのが持論であった。

【議事堂とテムズ河と St. Thomas's Hospital】

緒方先生が 1966 年に撮影したロンドンの St. Thomas's Hospital の写真がある。

先生が着目したのは，病院を背にした Albert Embarkment の静かなたたずまいであった。

1173 年に創立されたという歴史あるこの病院と医学校(1723 年ごろ創立)は，テムズ河をはさんで，国会議事堂に向かい合って建っている。先生が撮影したのは，現在の新しい病院に立て替えられる前の古い病院だったが，自動車の通らない静かな河岸の Embarkment には，ところどころにベンチが置かれ，テムズ河や議事堂を眺めるいこいの場所となっている。先生は「けんさ」に次のように書いている。

「ここにかかげたのは St. Thomas's Hospital とその Medical School(手前)である(1966 年 5 月 1 日うつす)。この病院と医学校のかけがえのない特権は，テムズ河の右岸(東側)にあって，壮麗な国会議事堂と相対していることであるとおもう。現在の建物がいつごろの建築か知らないが，その全長は議事堂よりながく，壮麗さこそないが，6 つの病棟がほどよくならんでいるさまは，議事堂の側からでも，なかなか見ごたえがある。

病院のまえの路をとおって，医学校の横(南端)から河岸におりると，Albert Embarkment である。自動車がとおらないので，ほんとうにしずかである。ここは対岸の議事堂のテムズ河側の全景をながめるのに絶好の場所である。ところどころにおいてあるベンチに，入院患者らしい寝衣すがたを見かける。5 月のはじめで，並木はまだ芽がふいていないが，やがてもえるような緑の若葉がしげる。

この Embarkment は，騒々しいロンドンのまんなかに，病人や市民のために，そっと大事にとってある“いこい”の場所である。ロンドンには，ところどころに，こういう“ゆとり”を見かける。日本の首都東京には，どうもそれが感じられない。どうしてもほしいとおもう。」

そして，「病院というのは，その街の一番便利の良い所に，一番便利の良いように，立派な病院を建てておかないと意味がない。自分はそのつもりでこの写真を撮った」と語っていたという。

【Oxford の Magdalen College】

College の語源について，緒方先生は，「原語のラテン語 collegium は，col-(ともに)と lex(主幹 leg-)(おきて)の合成語で，“おなじおきて”で結ばれた組織，団体のことで，それが拡大して“学校，学園”，“学院”，“講義”などの意味をもつようになっている。またイギリスの Oxford 大学や Cambridge 大学を構成している各 College は“学寮”というのが当たっていよう」と書いている。(『通信』第 7 巻 第 10-12 号，1982 年 12 月)

Oxford 大学や Cambridge 大学の College は，最も古いものは 700 年くらいの歴史があるが，College は，昔，カトリックの僧侶が自分の領地に学生を集めて全寮制のカレッジを作ったのがはじまりだという。

Oxford の Magdalen(モードレン) College は 1448 年に創立され，もっとも美しく，もっとも富んだ College といわれている。

人口約 10 万の Oxford の目抜き通り High Street の

写真 8　ロンドンの St. Thomas's Hospital(1966 年当時)
テムズ河岸の静かな Embarkment
(「けんさ」2(4), 1971 より)

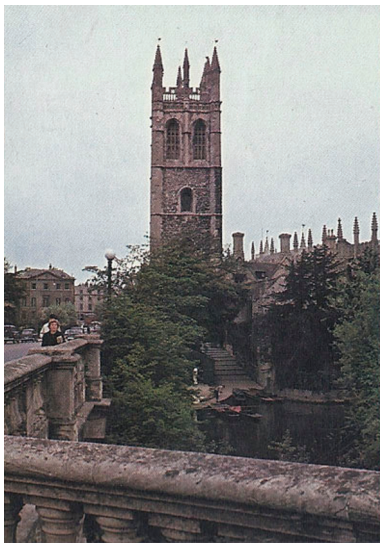

写真 9　オクスフォードの Magdalen College
(「けんさ」5(1), 1974 より)

東の町はずれに Cherwell River があって，美しい Magdalen Bridge がかかっている。その北側に Magdalen College がある。緒方先生はここを訪れて写真を撮った。

「構内はひろくて美しく，奥にある Magdalen grove にはシカがいる。この College の塔は美しい。High Street に面する建物にちょっとした芝生と植え込みがあった。窓から見える部屋には灯がついていた。」「イギリスの大学で気がつくのは，手入れがいいことである。つまりこころがこもっているのである。」

心を大切にする先生の気持ちが表れた，あたたかく，どこか懐かしい写真である。

【同学院の紋章と緒方先生】

ツタの葉とラテン語をあしらった同学院の紋章は，緒方富雄先生の創案であるが，紋章の創作は，先生の特技であった。

「わたくしには，ちょっとかわった芸がある。紋章や文鎮やメダルの創作がそれである」「わたくしの創作紋章には，ひとつの基本的態度がある。ヨーロッパで発達した西洋式紋章の作法を尊重しながら，創作するというのである。この作法にしばられるところに，おもしろみがある。」(けんさ Vol.3 No.6, 1972)

紋章は，氏族，家などの標識で，日本では家紋に相当する。紋章は 11～12 世紀にはじまったというが，15 世紀に最も活躍したイタリアの都市国家，フィレンツェのメディチ家の先祖が，率いる騎士団の目印として紋章を用いた。それが他の軍団にも応用され，十字軍とともにヨーロッパ中に伝播したといわれる。

紋章は，やがて貴族のシンボルとなり，英国でも貴族の各家がそれぞれの家系の紋章を持っている。

西洋の紋章は盾の形をしている。これに，冠や盾を支える動物や人，家訓や信条などのモットーを入れたりする。盾を幾何学的に分割する方法や，色づかいにもきまりがあるのだという。

オクスフォード大学の紋章は，盾の中に開いた本があり，その上に王冠が 2 個，下に 1 個。本にはラテン語で文章が書かれている。下部のリボンに「OXFORD UNIVERSITY」の文字がある。

先生は，東京大学医学部の紋章，同じく鉄門クラブの紋章，緒方医学化学研究所の紋章など，30 種以上の紋章を創作した。単なるデザインでなく，ヨーロッパの紋章の基本にのっとっているところが，さすが，といえよう。

【ヒポクラテスの木と緒方先生】

今，日本全国の大学医学部や病院で，「ヒポクラテスの木」と呼ばれるスズカケの木が大きく育っている。学名は *Platanus orientalis* といい，日本の街や公園でよく見かける種類であるが，これらのスズカケの木は，生い立ちがちょっと違う。

「いまのギリシアの東にエーゲ海がある。そのエーゲ海が地中海にひらけようとするあたりにたくさんの島が散在している。その島々のなかでもいちばん東の端で，小アジアにほとんど接触するほど近いところにコス島(Cos)がある。医学の父といわれるヒポクラテス(Hippocrates)は，紀元前およそ 460 年ごろこの島で生まれた。

このコス島は，西南から東北にほそながくのびていて，その東北端の海岸にコスの町がある。その町の中心に広場があって，そこにふるいふるいスズカケの木がある。ヒポクラテスがその木陰で弟子たちに医学を教えたと伝えられている。」

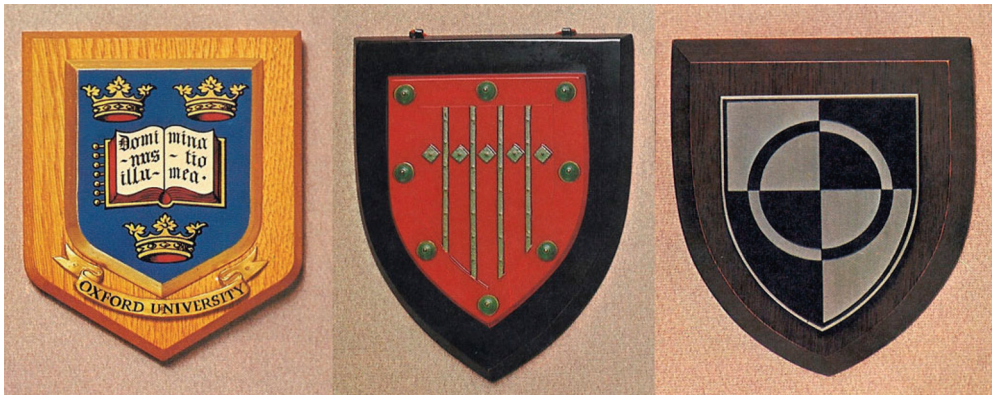

写真 10
(左から)オクスフォード大学の紋章，東京大学医学部の紋章，緒方医学化学研究所の紋章

写真 11　東大医学部図書館前の ヒポクラテスの木(1976 年)
向かって右はコス島のコルラキス市長夫妻，中央が緒方先生。
(「けんさ」7(3/4), 1977 より)

緒方先生は，1961 年 12 月，アメリカのワシントン近郊ベセスダの国立医学図書館の開館式に出席した折，駐米ギリシア大使が，スズカケの芽生の鉢植を贈呈し，ヒポクラテスの精神がここにもさかえるようにとあいさつしたのを目のあたりにした。1968 年の初夏，先生がそこを訪れると，もう 3 m 以上の若木になって，「ヒポクラテスの木(スズカケノキ) ギリシアのコス島より」という英文のプレートが石にはめこまれていた。

「わたくしは，実はこのコス島のヒポクラテスの木の芽生を日本にうつしうえたいとおもって，ギリシアの友人とてがみのやりとりをしている。」

緒方先生は，日本に「ヒポクラテスの木の会」を設立，医学部や病院に植樹をすすめてきた。

先生は 1977 年，『けんさ』7 巻 3/4 号で，「この木の種子を日本に持ち帰ってリッパな若木に育てあげた人が 2 人いる。山形の篠田秀男博士と新潟の蒲原宏博士である。わたしは 1972 年 2 月，当時のアテネの Evangelismos 病院長 Dr. Doxiadis から，コス島でそだった若木を贈られ，しばらく庭でそだてたのち，1975 年 11 月に東大の医学図書館前に移植してもらった。いずれも元気である。」と記した。

ヒポクラテスの木の分身は，その後，日本赤十字社創立 100 周年記念(1977 年)にギリシア赤十字社から贈られた苗木も加わり，多くの医療施設で，ヒポクラテスの精神の象徴としてゆたかに茂っている。

【意外？　涙もろく，大の巨人ファン】

「通信」の緒方富雄先生追悼号(第 14 巻，1980 年 10 月)には，現役時代の緒方先生について，大変厳しく，学生や教室員が遅刻すると厳しく叱られたという思い出や，教室での先生は厳格な「大将」であったなど，「厳しい」「いかめしい」といった印象が語られている。しかし一方で，「話題が豊富」「温かく包容力の大きさ」「どこか童心を感じさせる」といった感想も述べられている。

2009 年，第 25 回緒方富雄賞授賞式の席上，ご子息の緒方洪章氏は，「多くの方が，父について，いかめしくて怖かったなどと言われるのですが，そういう面ばかりではありませんでした」と，生前のエピソードを語られた。

緒方先生は非常に涙もろい一面があったようで，映画「風と共に去りぬ」を観ていたときのこと。北軍に蹂躙されて廃墟となった故郷にたどりついたスカーレットが，タラの大地に立って「私は負けない」と叫ぶ感動的なシーンがある。気がつくと，近くで盛んに鼻をすする音が聞こえる。もしやと隣を見ると，先生が泣いていた。

「父がこんなに心を動かされる人なのかと，びっくりしました」ということであった。

また，先生は野球が好きで，大の巨人ファンだった。当時は王，長嶋の全盛時代。

先生は書斎ではさびしいからと，テレビのある子供たちの部屋に来て，原稿を書いていたが，阪神が勝っている間は，だまって執筆に専念しているのだが，巨人が巻き返して優勢になると，急に機嫌がよくなって，冗舌になり「君，このごろ絵の調子はどうだね」(洪章氏は画家である)などと言い出すのだとか。

なぜ巨人ファンなのか聞いたところ，「最強のものを応援していれば，精神衛生上，大変よろしい」から，という返事だったそうだ。先生の面目躍如といったところである。

本論文は「日本臨床検査同学院ホームページ」にカラー(写真)で掲載してあります。